

入選 埼玉県 清水 秋男 様 (60代)

先日横浜中華街で25年ぶりとなる同窓会が開かれた。

久しぶりに会う旧友たちは、髪の毛が白かったり、ほぼほぼ無くなっていたりする。

旧友たちと挨拶する度に当時の面影をなんとか探して、必死に名前を思い出そうとするのだが、老年期に入った者は「あれ、あれ、」とか「それ、それ、」とか忘却するのが常、なかなか名前が出てこない。

しばらく名前を言わずに会話しなければならぬ苦しい時間が続いたりする。

厨房から中華鍋をお玉でカカンカカンとリズムカルに叩く音が聞こえてくる。程なく油とオイスターソースが混ざりあった匂いが漂ってくる。すると条件反射のごとく、突然に空腹感に包まれてしまう。

空腹感を抱えながら久しぶりに会った旧友たちとおしゃべりをする。

50年以上前に中学生だった旧友たちは今年で65歳になる。

この年齢で一番盛り上がる話といえば、病気のこと、病院のこと、薬のこと。要するに健康関連の話題だ。

どちらかと言えばネガティブな話題なのに、なぜあんなにも盛り上がるのか不思議だ。

なぜか自慢げに「俺はこんなにたくさんの薬を飲んでる」だの、どういうわけか目を大きく見開き、鼻息も荒く「俺はこんな大きな病気をした」だのと話になる。そんな旧友たちの話を聞きながら、自分も頭の中でこの旧友よりも大きな病気をしてなかったか探し始めている。

そんなたわいもない話をしている中で、1人が年金の話をはじめた。同窓生なので、全員が年金受給年齢になるのだ。

その旧友がしみじみと言った言葉が忘れられない。

「俺もちゃんと年金払っておけば良かったよ」

旧友は、若い頃から「大人の言う事など信じない、先生の言うことなどもっと信じない」などといつも言っていた。

学校や社会に反発することがかっこよくて、大人っぽい生き方だ。

そんなふう思い込む自分自身に陶醉していたのかもしれない。

その旧友がどういう人生を歩んできたのか、わからないが、年金の保険料を払い込んでこなかったらしい。その結果、今（65歳）となって年金の受給ができないことを嘆いているのだ。

若い頃は、多くの勘違いや間違っった思い込みに囚われることがある。

たとえば、この友人のように学校への反発や社会への反抗がカッコいいと思える時がある。今思えば自分も少なからずそんな気持ちを持っていたような気がする。

若いときは体力も気力もあり、活気に溢れている。なんでもできるんじゃないか、なんとかなるんじゃないかと思ひこむ、根拠のない自信にも溢れているのだ。

しかし、年齢を重ねるに伴い確実に体力は落ちるし、気力も維持し続けるのは難しくなる。

この旧友以外にも年金受給年齢を迎えて「ちゃんと払っておけば良かった」と聞くことが多い、いや、その言葉以外聞いた事がないくらいだ。

だから私のかかわる狭い世界ではあるけれど、「100%65歳になって年金（保険料）を払っておけば良かったって思うよ」と若い人たちに言っておきたい。

65年という歳を重ねた今、ふと考えることがある。

それは、「幸せ」ということについてだ。

何よりも健康であることは何物にも替えがたい大きな「幸せ」であることは間違いない。健康を望まない人などいないし、多くの人は神仏にお願いすることといえば「健康に過ごせますように」だろう。

同窓の友人たちも、今が健康だからこそ過去の病気のことや薬のことを夢中で話すのだろう。

若者が考える「幸せ」という言葉の周りには、大きな夢や希望をまとっている。その大きな「幸せ」への道のりは遠く、果てしない。「幸せ」を掴むために気負いすぎ、頑張りすぎ、身体や精神を壊してしまうこともある。

しかし、歳を重ねてくると身の丈に合った夢や希望に変わってくる。

若い時に一生懸命目指していた大きな夢や希望の皮を、納得しながら1枚1枚はいでいくと小さな「幸せ」が見えてくる。

小さな「幸せ」とはなんだろう。

初めて入った店で、迷った末に注文したラーメンがめちゃくちゃうま〜くスープまで飲み干してしまった。

さっきまで雨が降っていたのに雲が切れ、そこから大きなまん丸の月を見ることができた。

道端のアスファルトのひび割れから顔を覗かせている小さなタンポポを見つけた。

日々の生活の中でたくさんの小さな「幸せ」をフッと見つけることはできます。

そんな小さな「幸せ」を感じとれるのは、日々の生活が足りていて、不安の影が無いからだと思う。

日々の生活に汲々としている人は、道端の草花をみるよりも、空腹を満たすことを考えるだろう。

贅沢三昧な暮らしをしている人は、バラの根本に咲いている小さな草花など気づきもしないだろう。

小さな「幸せ」は、そこ、ここで見つけることができます。

それに気付く人は大金持ちでも生活困窮者でもなく、ごく普通に生活できている人達です。

今私は年金受給の年齢となり、生活の不安が無くなることで誰にでも見つけることができる小さな「幸せ」を感じとり、それに気づくことができる。

そんな日常の小さな「幸せ」を紡ぐもの…。